

英語のスタイル

教えるための文体論入門

STYLISTICS FOR ENGLISH LEARNERS

MASANORI TOYOTA / MASAHIRO HORI / OSAMU IMAHAYASHI

豊田昌倫
堀 正広
編著 今林 修

はしがき

本書の目的は、言語学と文学研究の境界領域に位置し、両者の架け橋である文体論の観点から、英語教育、特に、英語の4技能(聞く、話す、読む、書く)の修得や教授において有益と思われる文体論の知見を提供することにあります。英語教育における文体論の専門的な概説書というよりはむしろ、わかりやすく書かれた入門書として企画されていますので、文体論になじみのない方々にも、文体分析や文体論に興味を持っていただける内容になっています。

対象は、中学校、高等学校、大学などの英語教師、ならびに大学で開講されている「英語入門」、「英語学入門」、「英語文体論入門」のような教養もしくは専門における入門科目の受講生を念頭に置いています。

本書の特徴でもあり、また、執筆者が始終意識しながら執筆しました点は、以下の通りです。

- (1) できるだけ専門的な用語は使わないで、理論より実践面を重視する。
- (2) 英語の4技能を念頭に、会話(リスニング・スピーチ)編、読解(リーディング)編、英作文(ライティング)編に分けて、中学校、高等学校、大学での授業・講義・演習で役立つように構成する。
- (3) 英語文体論の入門書として、授業や講義でテキストや参考書として使用することができるよう配慮する。

本書の出発点について少しだけ触れさせていただきます。2015年5月24日に立正大学で開催されました日本英文学会第87回大会のシンポジウム「文体論に基づく英語教育再興」(司会・コメンテーター 豊田昌倫、講師 中川憲、菊池繁夫、堀正広、斎藤兆史)が、本書の起源です。文体論の知見から現行の英語教育を問い直すことをテーマとしたシンポジウムでした。このシンポジウムは、聴衆の数が多くだけでなく、北は北海道から南は九州まで、大学の教員のみならず、学生、院生、そして、中学校、高等学校の教師など実に様々な人が参加し、有り難いことに好評でした。この結果に勇気づ

けられて、シンポジウムの目的に沿った「文体論から英語教育への貢献」を趣旨とした企画本を出版しようという構想が持ち上がりました。

このシンポジウムの背景には、今日の英語教育では「英語」より「教育」が先走り、英語科内容学が軽視されていることへの不安や不満や不信を払拭しようという意気込みがあったように思います。英語教育にとって「英語」と「教育」は車の両輪のように等しく同じ方向に同じだけ進んでいかななくてはなりません。教え方を議論するのも結構ですが、英語のスタイルに注目してもっと英語そのものを大切に扱おうと、今までとは違った新しい英語教育が展開できるのではないのでしょうか。是非、英語の扱い方をそれぞれの分野のスタイル分析の達人から学んでください。どの章から読んでいただいても、内容がわかるようになっていきますから、興味関心のある分野から読み始めていただいて構いません。

教える側が今までは意識せずにいたスタイルについて意識し、さらにそれを学ぶ側に気づかせることで、学校や大学での授業や講義内容に変化が生まれるでしょう。そして、文体論の基礎を理解することによって、英語の4技能の修得や教授に進歩と発展が見られることを心より願っています。

最後になりましたが、企画・立案より出版に至るまで、時には厳しく、しかし常に辛抱強く編集の作業を懇切丁寧に支えていただきました研究社編集部の方と津田正氏と煩雑な校正と索引作成にご尽力いただきました高野渉氏に、末筆ながらここに衷心より感謝申し上げます。

2017年1月

今林 修

I	はじめに	1
第 1 章	スタイル(文体)とは何か	豊田 昌倫 2
1	はじめに 2	
2	スタイルとは 3	
3	スタイルと文体 4	
4	ヘッドラインのスタイル 5	
5	選択とスタイル 8	
6	おわりに 11	
第 2 章	スタイル(文体)から英語学習を見直したい	今林 修 13
1	はじめに 13	
2	鍵となる表現 14	
3	単語の頻度数 16	
4	繰り返し 17	
5	選択と一貫性 18	
6	物理的特徴と文体的特徴 19	
7	連続する語の頻度数 20	
8	修辭法と文体論 21	
9	一貫性の欠如 22	
10	作者エリック・カールかく語りき 22	
11	おわりに 23	
II	基礎編	25
第 3 章	音にはスタイルがある	豊田 昌倫 26
1	はじめに 26	
2	音への「気づき」 27	
3	骨格は子音 29	
4	語頭と語末の /t/ 30	
5	声門閉鎖音 32	
6	異音としての [ʔ] 33	
7	おわりに 35	
第 4 章	語の選択とレジスター	野村 恵造 37
1	言葉を選ぶ 37	
2	プラスイメージの語とマイナスイ メージの語 38	
3	堅い英語とくだけた英語 40	
4	「単語を知っている」とは? 46	
第 5 章	コロケーションとスタイルと英語学習	堀 正広 48
1	はじめに 48	
2	コロケーションとは何か 48	
3	コロケーションと文法 49	
4	コロケーション学習の重要性 52	
5	コロケーションとスタイル 53	
6	コロケーションと文学の言語 56	
7	さいごに 59	

第 6 章	文のスタイル	菊池 繁夫	60
1	はじめに 60	4	効果的な文章を味わってみる 65
2	能動態から受動態へ 60	5	効果的な文章を書いてみる 68
3	態の選択と「聞き手が知っている事柄」 61	6	まとめ 69
III	会話 (リスニング・スピーチ) 編		71
第 7 章	会話の英語とは	豊田 昌倫	72
1	はじめに 72	4	リラクゼーション 76
2	会話の位置づけ 73	5	おわりに 86
3	「実用会話」と「日常会話」 74		
第 8 章	会話のスタイル	山崎 のぞみ	87
1	はじめに 87	4	現実の会話——ターンテイキングと相づちのスタイル 95
2	ターンテイキング——ターンを交替する 89	5	おわりに 100
3	相づち——聞き手としての役割 92		
第 9 章	<small>ポライトネス</small> 丁寧さのスタイル——アリスとハリーのおしゃべりに注目して	椎名 美智	102
1	はじめに 102	4	呼びかけ語から見るアリスのネットワーク 105
2	距離感を示す「ポライトネス」について 103	5	呼びかけ語から見るハリーのネットワーク 108
3	人間関係を構築する「呼びかけ語」 104	6	おわりに 113
第 10 章	スピーチのスタイル	瀬良 晴子	115
1	はじめに——スピーチのスタイルから学べること 115	4	声について——大きさ、話す速さ 120
2	演説と修辞学についての文化的背景の違い 116	5	わかりやすさ比較——演説原稿を用いて 123
3	効果的な言葉の技法 118	6	おわりに 124
第 11 章	映画で学ぶ会話のスタイル	山口 美知代	127
1	映画の会話とスタイル——『アナと雪の女王』 127	4	インフォーマルなスタイル——『ベイマックス』 133
2	フォーマルなスタイル——『ローマの休日』 129	5	スタイルと社会言語学的特徴 135
3	古めかしいスタイル——『ダーク・シャドウ』 131		

IV	読解 (リーディング) 編	139
第12章	文体に注意を払って読むとは	阿部 公彦 140
1	小説を上手に読むために 140	
2	ジョージ・エリオット『ミドルマーチ』の言語術 141	
3	長文の使い方 143	
4	一般論の使い方 145	
5	人物を登場させる 148	
第13章	学習者用読み物 (graded readers) のスタイル	魚住 香子 154
1	graded readers (GR) とは? 154	
2	GR とバリエーション 156	
3	GR における描写場面 161	
4	GR における authenticity 164	
第14章	新聞・雑誌のスタイル	高見 敏子 166
1	はじめに 166	
2	見出し (headline) の特徴 166	
3	雑誌 <i>TIME</i> の英語——“Timese” 170	
4	英国の新聞——大衆紙と高級紙 173	
5	おわりに 176	
第15章	小説のスタイルをどう教えるか	佐々木 徹 178
1	はじめに 178	
2	テキストの語り手 179	
3	「殺し屋たち」の分析——語り手による読者の誘導 180	
4	誰の言葉か? 誰の意識か? 184	
5	「殺し屋たち」の分析——自由間接文体 186	
6	おわりに——小説を味読する 188	
第16章	詩のスタイルをどう教えるか	中川 憲 191
1	はじめに 191	
2	英詩のリズムと韻律 192	
3	韻 (rhyme) 197	
4	ヤーコブソンの詩的機能 197	
5	「水仙」に見られるこだま式押韻 200	
6	音の等価性 (鏡像関係をなす音) 202	
7	意味の等価性 203	
8	おわりに 205	
V	英作文 (ライティング) 編	207
第17章	英作文とスタイル	富岡 龍明 208
1	はじめに 208	
2	柔らかい表現 vs. 堅い表現 209	
3	簡潔で無駄のない表現 213	
4	語句や文の適切な配列 217	
5	おわりに 221	

第 18 章	e-mail のスタイル	奥 聡一郎	223
1	e-mail とは 223	4	e-mail のスタイルを分析する 229
2	e-mail と letter 224	5	さいごに 233
3	携帯端末 (スマートフォン) での e-mail 227		
第 19 章	アカデミック・ライティングとは	竹下 裕俊・堀 正広	235
1	はじめに 235	3	研究論文としてのアカデミック・ラ イティングのスタイル 240
2	good writing としてのアカデミック・ ライティングのスタイル 236	4	さいごに 250
第 20 章	科学論文のスタイル	野口 ジュディー	252
1	科学論文とは? 252	4	典型的な論文要旨のムーブ・パター ンと表現 258
2	科学論文のスタイルの特徴を ESP の 観点から捉える 253	5	結び 259
3	コーパス活用の勧め 256		
第 21 章	創作英作文——理論と実践	斎藤 兆史	261
1	外国語としての英語の学習者に創作 は無理なのか 261	4	教育実践 268
2	創作文体論とは 262	5	学習者レベルに合った創作英作文 274
3	創作実践 264		

読書案内	今林 修	277	
1	はじめに 277	3	英語文体論に関する英語で書かれた 基本的文献 283
2	英語文体論に関する日本語で書かれ た基本的文献 277	4	英語文体論に関する英語で書かれた 重要文献リスト 285

索引	288
執筆者一覧	294



はじめに

スタイル (文体) とは何か

豊田 昌倫

1 はじめに

いつも利用する電鉄系のバスでは最近、英語のアナウンスをするようになりました。国際高等学校が近くにあって、生徒をはじめ外国人利用者のための放送なのでしょう。停留所が近づくと、

(1) Please get off at the next stop.

とテープの声が流れます。とても丁寧な表現と口調で、日本語の「次のバス停で下車してください」の英訳かもしれない、などと考えているうちに思い出したのが、ロンドン市内バスのアナウンスです。

(2) This is Percy Street. *Alight* here for the British Museum.

なんと、命令文の *Alight here!* 何よりも動詞 *Alight* を聞いて、一瞬、耳を疑いました。というのは、まず思い浮かべたのが、19世紀前半に出版されたトマス・ドゥ・クウィンシー (Thomas de Quincey) 『英国阿片常用者の告白』のある場面だったからです。原文をお見せしましょう。

(3) I found that we had reached Maidenhead—six or seven miles, I think, a-head of Salt-hill. Here I *alighted*: and for the half minute that the Mail stopped, I was entreated by my friendly companion . . . to go to bed without delay. (*Confessions of an English Opium-Eater*)¹

1 De Quincey, T. (2003 [1821]) *Confessions of an English Opium-Eater and Other Writings*. London: Penguin, 33.

主人公がロンドンからブリストルへ向かう乗合郵便馬車 (Mail Coach) から下車するときの描写です。この小説を初めて読んだテキストの ‘Introduction’ では、大塚高信博士が『夕闇に^{むせ}咽び泣く胡弓の音のやうに深い哀感の流れ』ゆえにか、吾國では昔から英學者に親しまれて来た²と紹介されています。

Oxford Advanced Learner's Dictionary は、*alight* に ‘to get out of a bus, a train or other vehicle’ の語義を与えています。ただ、用法ラベルは ‘*formal or literary*’ とありますので、フォーマルで文語体の語が、現在のロンドンでは、ごく日常的なアナウンスメントに使われている、ということになります。乗り物は 21 世紀の新型「ルートマスター」でありながら、英語は 19 世紀の古色蒼然たる馬車にふわしい *alight*。さすが、古き伝統を誇る英国ならではの言語事情です。

2 スタイルとは

英語学者のジェフリー・N・リーチ (Geoffrey N. Leech) は、

- (4) The bus we got on was the one he'd *got off*.
 (5) The bus which we boarded was that from which he had *alighted*.³

について、口語的な (4) に対して、(5) は文語的で「おおげさな」(pompous) 文、と述べています。その根拠として関係代名詞、縮約形、文末での前置詞の有無などが挙げられていますが、重要なのは語彙の *get on* と *board*, *get off* と *alight* の対比でしょう。(4) を標準的で基本的な文とすれば、(5) はフォーマルで文語的、もったいぶった変種と考えられます。このような表現の様式をスタイルと呼びます。したがって、(5) は「おおげさなスタイル」とか「古風なスタイル」の文といえるでしょう。

2 大塚高信 (編) (1956 [1949]) *Confessions of an English Opium-Eater*. 大阪: 大阪教育図書, Introduction.

3 Leech, G. N. (1969) *A Linguistic Guide to English Poetry*. London & Harlow: Longmans, 10.

ところで、英国の鉄道用語では、フォーマルな表現が珍しくないようです。地下鉄でのアナウンスメントでは、形式ばった

(6) This train *terminates* at Edgware.

が聞かれますし、鉄道では car (客車) を accommodation, guard (車掌) を senior conductor, ticket (切符) を travel document と呼ぶことがあります。first class accommodation は「第一級の宿泊設備」ではなく、列車の「一等車」のこと。注意が必要です。Railspeak (鉄道用語)⁴ と称される語彙は、官僚的なお役所仕事に関連があるのではないのでしょうか。英国鉄道 (British Rail) が民営化された今でも、大きな変化は見られないようです。

3 スタイルと文体

これまでスタイルという語を用いてきましたが、英語の style は文体と訳されるのが普通です。stylistics は文体論となり、書き言葉の文体を研究の対象としてきました。これは訳語上の制約とともに、style が *stilus* (ラテン語で文字を書くための尖筆) という語源に由来していますので、例えば、「サリンジャーの文体」「村上春樹の文体」など、文学作品を中心とする文のスタイル論が、stylistics の主要な研究分野と考えられてきました。また、ピエール・ギロー (Pierre Guiraud) は古典的な『文体論』(1959) で、スタイルを「文章の書きかたであり、作家が文学的な目標のためにいろいろの表現手段をつかって作品にまとめあげるやりかた」⁵ と定義しています。このようにスタイルを「文章の書きかた」ないし文章の様式と解するのが、スタイル論の通則のようです。

なお、文体という語のイメージを思い浮かべるには、次の多和田葉子氏による説明が参考になります。「人間だけではなくて、言語にもからだがあ

4 Rees, N. (1994) *The Politically Correct Phrasebook*. London: Bloomsbury, 119.

5 ギロー, ピエール (1995 [1959]) 『文体論: ことばのスタイル』(佐藤信夫訳) 東京: 白水社, 13. (Guiraud, P. (1972 [1955]) *La stylistique*. Paris: Presses universitaires de France, 11.)

る、と言う時、わたしは一番、興奮を感じる。日本語にも、たとえば、文章のからだ、『文体』という言葉がある。文章はある意味を伝達するだけではなく、からだがあり、からだには、体温や姿勢や病気や癖や個性がある。つまり言語にも生きたからだがあり、意味内容だけに還元してしまうことはできない⁶。

他方、書き言葉以外のスタイルも忘れられたわけではありません。外山滋比古氏はすでに『日本語の感覚』(1975)の中で、文体に対して「話体」(話し言葉のスタイル)という語を用いられています⁷。また、近年改訂された多くの国語辞典は、「話体」を見出し語に採用して、「話し言葉特有の語や表現形式」などと定義しています。具体的には、スピーチや会話など音声による言葉のスタイルを指すのでしょう。

しかし、残念ながら、この用語の使用は少数派に限られて、今のところ、一般には広まっていないのが実情です。ただ、スタイルを部門に下位区分して、文、語そして音を対象とした場合、語の文体とか音の文体では意味をなしません。したがって、この場合は「語のスタイル」とか「音のスタイル」と言わざるをえないようです。そこで、本章では「話し言葉と書き言葉の様式」の意味で、また包括的な用語として、スタイルを用いることにしました。次の項目で扱う新聞英語や広告など視覚を重視するテキストに関しては、スタイルが最も適切な用語となりそうです。

4 ヘッドラインのスタイル

2011年8月上旬、ロンドン市内で暴動が発生。——この事件は日本でも「ロンドン燃ゆ」として大きく報道されました。現地では炎に包まれる首都の様子が連日テレビで放映され、私が滞在していたホテルに近いボーダフォンのショップにも、投石により破壊された跡が残り、不穏な数日を過ごしました。青年層失業率の増加、前年に解禁された大学授業料の値上げ、不法移民による治安の悪化など、暴動へ向かう潜在的な要素が、1つの発砲事件をきっかけに火を噴いたのでしょう。

6 多和田葉子(2003)『エクソフォニー：母語の外へ出る旅』東京：岩波書店、178。

7 外山滋比古(1975)『日本語の感覚』東京：中央公論社、34-43。

8月9日付の新聞各紙の見出しを御覧ください。

- (7) ANARCHY (*The Sun*)
- (8) YOB RULE (*Daily Mirror*)
- (9) ANARCHY IN THE UK (*Daily Star*)
- (10) THE ANARCHY SPREADS (*Daily Mail*)
- (11) Mob rule (*The Independent*)
- (12) Mobs rule as police surrender streets (*The Times*)
- (13) Cameron flies back from holiday to tackle crisis as riots spread through London (*Financial Times*)

いずれも朝刊の第1面に掲載されたヘッドライン。とりわけ、黄色に燃え立つ炎の中、建物の4階から飛び降りる女性の黒いシルエットを写した *Daily Mirror* と *The Times* の紙面は衝撃的で、今なお脳裏から消えることはありません。

さて、上のヘッドラインにはそれぞれ特徴があり、どれも個性的であるのが一目瞭然です。例えば、(7)ではANARCHYの1語であるのに対して、(9)ではin the UKを加えて、ANARCHYが全土に広がったとの印象を与えます⁸。対照的なのは、(13)の経済専門紙 *Financial Times* で、トップ記事にはアメリカにおける株価の急落が選ばれ、ロンドンの暴動は1面の最下段で小さく掲載されているにすぎません。中立性と横並びが好まれる日本の新聞とは異なり、各紙に見られる個性的なスタイルには目を見張ります。

以上7紙のレイアウト、活字、動作主、語数について、次の表にまとめました。

8 ANARCHY IN THE UKには、英パンクロック・グループ「セックス・ピストルズ」(Sex Pistols)が、1976年にリリースして一世を風靡した同名のソングがあり、大衆紙ならではのひとときわ際立つヘッドラインになっています。

表1 ヘッドラインの構成

新聞名	レイアウト	活字	動作主	語数
(7) <i>The Sun</i>	全部	大	ANARCHY	1
(8) <i>Daily Mirror</i>	全部	大	YOB	2
(9) <i>Daily Star</i>	全部	大	ANARCHY	4
(10) <i>Daily Mail</i>	全部	大	THE ANARCHY	3
(11) <i>The Independent</i>	全部	小	Mob	2
(12) <i>The Times</i>	全部	小	Mobs / police	6
(13) <i>Financial Times</i>	一部	小	Cameron / riots	13

レイアウトは第1面の「全部」か「一部」か、また活字は文頭を除いて「大」文字か「小」文字か、などの対比を示してあります。全紙が異なる構成素をもつところから、ヘッドラインの多様性が裏書きされるでしょう。また、活字では4紙が白抜きの特大フォントを採用し、最も大きいのが(7)の*Sun*紙。ANARCHYがタブロイド版の1行を埋めつくしています。

動作主ないし事件への参与者に関しては、1. (THE) ANARCHY, 2. YOB, Mob(s), riots, 3. police, Cameronの3つのタイプに区分できます。目を引くのは、(8)のYOBと(13)のCameronです。yobはboyの逆つづり語で、隠語ないし俗語のレベル。このようにセンセーショナルな関心を引く語から、対象となる読者層が容易に想像されるでしょう。(13)は暴動の描写をas以降の従属節に遅らせて、キャメロン首相の動静に焦点を合わせる独特のヘッドラインです。事件から距離をおいて、冷静に報道しようとする姿勢がうかがえる書き方です。

同一事件に関する報道の仕方がこのように異なり、スタイルの多様性を見せるのは、英国社会に抜きがたく潜む階級意識の反映ともいえるでしょう。事実、「大衆紙」の(7), (8), (9), (10)ではすべて大文字が使用され、視覚に訴える報道姿勢の一端をうかがわせます。ANARCHYは3種の大衆紙に採用され、他方、「高級紙」と目される(11), (12), (13)では、より穏健な書き手の態度が見てとれます。象徴的なのは(8)のYOB RULEと(11)のMob ruleの対比でしょう。標準語から俗語に至る同義語の中からYOBやMobなど特定の語を選ぶこと。こうした複数の変種ないし可能性からの選択が、表現のスタイルを生み出す契機になります。

5 選択とスタイル

5.1 Pardon?

次に、同義表現から選択される例として、相手の言葉を聞きもらったときの「なんですか」に相当する言い方を考えてみます。よく知られている例は、Pardon? と What?。この2語をめぐって、英国ではすでに1950年代から議論されてきました。言語学者アラン・S・C・ロス (Alan S. C. Ross) は、1954年に発表した論文「UとノンU」(‘U and Non-U’)の中で、U(上流階級 (upper class))と non-U(それ以外の階級)の英語をこの二分法で説明しています。「Pardon? は non-U が使う語で、U は What? と言う」とロスは述べています⁹。

この論文を取めた Penguin 版 *Noblesse Oblige* の出版(1956)以降、上流志向の中産階級が Pardon? を避けるようになってきました。今にして思えば、学生時代に英国人教師から、聞きなおすときには Sorry? を使うように、と教わったのは、Pardon? を避けるための方策だったのかもしれませんが、となると、What? Pardon? Sorry? という3つの選択肢が考えられますが、現在、第4の可能性を知りました。2つの説をご紹介します。

まず、批評家のテリー・イーグルトン (Terry Eagleton) は、『アメリカ的、イギリス的』(2014)の中で、次のように述べています。

- | | |
|--------|----------------------------|
| (14) { | What? (上流階級) |
| | Sorry? (中産階級) |
| | Pardon? (下層中産階級) |
| | Aye? (労働者階級) ¹⁰ |

Aye? はイングランドというよりも、アイルランドなどの地方方言のように

9 この論文は Mitford, N. (ed.) (1956) *Noblesse Oblige*. Harmondsworth: Penguin, 9-31 に収められています。Pardon? と What? については、p. 27, ‘Pardon!’ の項目参照。

10 イーグルトン, テリー (2014) 『アメリカ的、イギリス的』(大橋洋一・吉岡範武訳) 東京: 河出書房新社, 32. (Eagleton, T. (2013) *Across the Pond: An Englishman's View of America*. New York: Norton, 17)

思われるのですが。

第2の説では、労働者階級は上流階級と同じ What? を使用するが、発音の仕方が異なる、とされています。すなわち、社会人類学者ケイト・フォックス (Kate Fox) の *Watching the English* (2014) では、U と non-U はいずれも What? と言うが、労働者階級は「t を落として」Wha'? と発音する¹¹と説明されています。Wha'? は語末の t を「落とす」というよりも、最近はやりの声門閉鎖音を用いる「ウォッ」に近い発音を指すのでしょうか。となると、フォックスによれば、現在の英国においては、

- | | |
|--------|-----------------------|
| (15) { | What? (上流階級) |
| | Sorry? (上層中産階級) |
| | Pardon? (中層中産、下層中産階級) |
| | Wha'? (労働者階級) |

という、社会層と関連する4つの選択肢があることになります。

これは特定の表現から、話し手や書き手の身元、とりわけ階級を識別できるという発想です。このようにスタイルは、「個人の特徴」ないし「身元証明」(identification)の意味で使われることもあります。

なお、われわれ外国人が話すときには、両極端の What? や Wha'?, あるいは Aye? を避けて、Sorry? か Pardon? でいいと思います。ただ、フォックスは Pardon? を言葉による「7つの大罪」(Seven Deadly Sins)の1つに挙げていますので、英国では Sorry? を使うほうが無難かもしれません。実際の用法を観察して、選択とその社会的な背景を考えるのも一興です。

5.2 indisposed

観察の一例を永遠の名画『ローマの休日』(*Roman Holiday*, 1953)からとってみましょう。オードリー・ヘップバーン (Audrey Hepburn) 扮する王女が、ホテルを抜け出して、お忍びで新聞記者のジョーと「休日」を過ごし、彼のアパートで1泊した後、大使の待つ滞在先に帰ってきたシーンです。

11 Fox, K. (2014) *Watching the English*, 2nd ed. London: Hodder & Stoughton, 105–106.

(16) Ambassador: Your Royal Highness . . . twenty-four hours . . . they
can't all be blank.

Ann: They are not.

Ambassador: But what explanation am I to offer Their Majesties?

Ann: I was *indisposed*. I am better.

「空白」の24時間について詰問する大使、それに対する王女アンの応答は、*I was indisposed*。「具合が悪い」を意味する他の同義語、*ill, sick, unwell*などを使ってもいいところですが、選ばれたのは *indisposed* でした。本来語 *ill, sick, unwell* のもつ具体性に対する外来語 *indisposed* の抽象性、本来語に対する外来語が暗示するよそよそしさ、そのコントラストは明白でしょう。それどころか、この *indisposed* からは、大使に対する反感、いや敵意さえ伝わってくるように思われます。

こうした語彙の意味特性をさらに補強するのが、王女アンの声、音のスタイルです。最後の2つの文は大略、

(16-1) I was indisposed. I am better.

のように聞こえます。いずれも下降調で発音されていますが、ピッチが中位から低位に下降する「低下降調」(low fall)であることに注意おきましょう。次に示す(16-2)は、これに対して、高位から低位に下降する「高下降調」(high fall)です。

(16-2) I was indisposed. I am better.

いずれの下降調も文とメッセージの完結を意味しますが、ピッチの差異は、どのような話者の態度を伝達するのでしょうか。

音声学者のJ・C・ウェルズ(Wells)は、2つの音調の差異は「感情的関与の度合い」による、と説明しています¹²。すなわち、高下降調は「関心」

12 ウェルズ, J. C. (2009) 『英語のイントネーション』(長瀬慶来監訳) 東京: 研究社, 326-27.
(Wells, J. C. (2006) *English Intonation: An Introduction*, Cambridge: Cambridge University Press, 218)

「興奮」「感情」「関与」の度合いの高さを示し、一方、低下降調は低さを含意する、というわけです。卑近な例を挙げますと、例えば、学生のレポートの評価として“Good”と書かれていると、文字の上ではおよそ60パーセントの達成度で「良」、 “Excellent”は80パーセント程度の達成度で「優」を意味します。

しかし、口頭で伝えるとなると、その評価はピッチの取り方によって大きく変動することになります。つまり、Goodは低下降調であれば、ほぼ60パーセントですが、母音をゆっくり引きのばして発音し、明確な高下降調を使えば、80パーセント近くにまで上昇させることも可能です。逆に、Excellentが低下降調で発音されれば、評価はかなり下落するかもわかりません。このように句や節の中で最も重要な強勢、すなわち、核強勢(nuclear stress)をもつ語のピッチの高低は、話者の選択に任されており、その選択は音のスタイルを生み出します。

V・J・クック(Cook)は、教育的観点から高下降調と低下降調の対比を簡略化して、前者を‘polite and friendly’, 後者を‘(very) cold and reserved’と解説しています¹³。会話における話者の人間関係は本来、‘polite and friendly’であるべきでなので、高下降調が基準となり、低下降調は逸脱したイントネーションであることがわかります。

話を『ローマの休日』に戻しましょう。公の場面では決まり文句や距離をおいた低下降調で話す王女も、ジョーとの「休日」では、髪をショートに刈り込み、恋する1人の女性に変身して、見違えるように生氣を取り戻し、声のピッチも高くなります。最後の記者会見で、実はジョーが新聞記者であることを知ったアン王女。揺れ動く「王女のスタイル」と「アンのスタイル」は、見る人の心を打たずにはおられません。

6 おわりに

本章ではいくつかの例を挙げて、スタイルの原理や考え方を説明してきました。英語のスタイル感覚を身につけるには、「観察」が出発点となるこ

13. Cook, V. J. (1980 [1968]) *Active Intonation*. London: Longman, 1-5, 60-64.

とは、すでに明らかでしょう。観察とは「ありのままの姿を注意してみること」と定義されますが、「注意して^レみる」とは、具体的にどのようにみればいいのでしょうか。

(16)の最終行、王女のセリフで考えてみましょう。まず、次の図を御覧ください。ここでは便宜上、語の意味と音を別個に図示してあります。

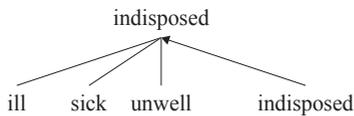


図 1

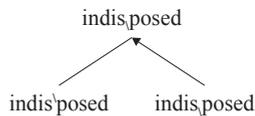


図 2

読み手ないし聞き手は、indisposed の意味を理解すると、すぐ次の語に移るのが普通ですが、そこで瞬時、立ち止まって、その語が浮上するプロセスを考えてみる。つまり、コンテキストを勘案して、他の可能性が排除されたプロセスに目を向ける、というわけです。具体的には、図1では同義語、図2では他の音調を考えてみればいいでしょう。生み出された結果としての indisposed だけではなく、生み出される過程を考えてみる、という読み方であり、聞き方です。

これから英語を読むとき、短時間でもこのような観察、言い換えれば「スタイル読み」を試みてみませんか。遅読になる可能性は大いにありますが、スタイル感覚を磨き、ひいては読解、聞き取りをはじめとする英語力の向上につながります。英語を聞くときも同様です。苦手だったヒアリングも楽しくなる、と予言しておきましょう。